

# 東井義雄における「いのち」の思想について

菊 藤 法

## はじめに

本稿は、戦前・戦中・戦後をとおして教育者、国語教育実践者として、また宗教者として自らの存在と児童生徒の教育に向きあい苦闘した東井義雄（明治45年〈1912〉—平成3年〈1991〉）の教育思想と教育実践を検討し、彼がめざした「いのちの教育」「こころの教育」「生きる力を育てる教育」の根底にある「いのち」の思想について考察するものである。

東井義雄の「いのち」の思想については、東井自身の「私の『いのち』の思想について」（『教育』99号、国土社、昭和34年4月発行）のほか、先行研究として、油井原均氏の「東井義雄の教育思想における「いのち」論形成過程の検討—戦前・戦中期の教育実践記録を中心に」（『立教大学教育学科研究年報』第41号、平成10年1月発行）、同「東井義雄の「いのち」概念について—日本浪漫派との関係を中心に」（『立教大学教育学科研究年報』第43号、平成12年3月発行）、菅原稔氏の「東井義雄著『学童の臣民感覚』について」（『武庫川女子大学紀要』第26集、昭和54年2月発行。後に「『学童の臣民感覚』と東井義雄の転向」と題して現代国語教育論集編集委員会編、菅原稔編集解説『現代国語教育論集成東井義雄』明治図書、平成3年刊に収録）などがある。これらの先行研究は、東井の教育実践の分析に基づいた彼の「いのち」概念の形成過程の考察や、戦時における東井の

臣民感覚・臣民思想の形成から終戦後の転向についての究明を行ったものであって、彼の「いのち」観、「いのち」の思想の基底をなしたと考えられる宗教観や哲学思想については必ずしも明確には示されていない。

本稿は、以上の先行研究の成果を参照しつつ、新たに調査して得た東井の生育歴や生活歴、戦前・戦後の教育実践をとおして、東井義雄における「いのち」観、「いのち」の思想のより根源的な解明を目指すものである。

なお、東井義雄の生涯については東井義雄遺徳顕彰会事務局編『東井義雄の生涯』（東井義雄遺徳顕彰会、平成6年刊）、八鹿町教育委員会・東井義雄先生を偲ぶ会編『心を育てる教育東井義雄先生』（平成10年刊）、現代国語教育論集編集委員会編、菅原稔編集・解説『現代国語教育論集成東井義雄』（明治図書、平成3年刊）のほか、平成16年9月5日と平成17年9月3日に実施した東井義雄記念館（兵庫県豊岡市但東町）での調査と、東井義雄の長男・故東井義臣氏（元・小学校教諭）夫人で浄土真宗本願寺派・東光寺（兵庫県豊岡市但東町佐々木）の坊守・東井浴子氏、曹洞宗・楽音寺（同町大河内）の住職で東井義雄記念館館長の宇治田透玄氏、同氏夫人で東井義雄の長女宇治田迪代氏、東井義雄の実妹で浄土真宗本願寺派本行寺（兵庫県豊岡市日高町宵田）の前坊守・小田正代氏からの聴き取り調査に拠った。

## I. 東井義雄の教育実践と理論の特質

東井義雄は、小学校の教師・校長時代、「綴り方」教育をとおして生徒と向きあい、対話を重ね、また、教師や保護者とも切磋琢磨しながら、生きる力を育てる教育実践に努めている。それが著書『村を育てる学力』（明治図書、昭和32年刊）や『土生が丘』『培基根』などの実践記録集として残っている。

東井の教育実践と教育理論の特質については、現代国語教育論集編集委員会編、菅原稔編集・解説『現代国語教育論集成東井義雄』（明治図書、平成3年刊）のI章「人と業績」の冒頭に次の3つがあげられている。

- 1、「生きていることのただごとでなさ」「いのち」の自覚に基づき、その「いのち」の現れである、一人一人の児童の思い方・考え方・・・を何よりも重視する、自己教育の立場で貫かれたものであること。
- 2、「書く」ことを中心とし、その機能を十分生かしながら、学習内容を児童の生活上の問題としてたぐりよせ、自分の問題として考えさせ分からせる、児童の内面活動を重視したものであること。
- 3、学習主体の確立と集団の中での解放とが図られた上で展開される、学習の結果のみではなく、過程をも重視するものであること。<sup>1)</sup>

東井の教育実践の原点として挙げられるのは、この中の1に示される「いのち」の自覚であろうが、その内実は如何なるものであったのか。

まず、同書から東井の教育実践と教育理論に関する記述を抄出すると下記のとおりである。

東井の教育実践が展開された兵庫県

の但馬地方は「十年一日のごとく進歩のない農法をくり返す地域」であり、そこで育つ児童は、生活の貧困を精神の貧困—主体性・自主性・自立性の欠如—として身につけているものととらえられ、「学校のになう『合理主義』『実証主義』の精神」に基いた教育を行う必要があった、といわれる。しかし、それでは児童に、故郷に見切りをつけて、都会へ出て行くことを夢見させる「村を捨てる学力」をつけることにならざるをえなかった。

このような課題に取り組んだ実践の記録が、後に「すべての教師、教育研究者が土台からゆりうごかされるような本」、「歴史的な本」と評価された『村を育てる学力』（明治図書、昭和32年刊）である。『村を育てる学力』は、当時の教育界に様々な反響を呼んだが、特に大きく取り上げられたのは、東井義雄の実践の根底に流れる「いのちの思想」と、それに基づく「生活の論理と教化の実践」論であった。<sup>2)</sup>

学習指導（授業）の場において、「生活の論理」を重視するということは、教師中心の「教える授業」を否定するということである。また同時に、児童に、主体的・自主的な「学習活動」を促すということでもある。（中略）

児童を、そのような、主体的・自主的な学習に立ち向かわせるためには、たとえその内容が知的・技術的なものであっても、根底に、それらに対する興味・関心・意欲—情意・情動—がなければならない。ここに、すべての学習を児童の身近な日常生活の中の事柄—それだけに興味・関心を持ちやすい—を「書く」ことによって「自分にひきよせ、自分のものとして考える」ことから出発させる、東井義雄の「くら

しの教科」が成立する。<sup>3)</sup>

以上の記述に、東井義雄の教育実践と教育理論の主要部分が要約されていると思われる。

また、東井は昭和35年(1960)に「教科の論理と生活の論理」を発表しているが、その中で次のように述べている。

授業ということは、生活の論理と教科の論理のかみあわせというよりは、教科の論理の生活の論理による主体化、血肉化を、子どもたち相互の生活の論理と生活の論理との磨きあいの中で押し進めさせる仕事だ、といってもいいのではないだろうか。そして、子どもたちは、めいめいの生活の論理で教科の論理を主体化し、血肉化し、それによって、生活の論理を更に客観性のある高次の論理にたかめ、さらにまた高次の教科の論理に食いさがって自分の論理をたかめ、広げ、太らせていくのではないかという気がする。<sup>4)</sup>

東井は、「授業」を、「教科の論理の生活の論理による主体化・血肉化を、子どもたち相互の生活の論理の磨きあいの中で推し進めさせる仕事」と捉えていたのである。

「生活」と離れた「教科」のみの学習を否定することで「教える教育」の限界を克服しようとしたのである。単なる「知識」の習得ではなく、現実の「生活」と結びついた「活きた知識や知恵」の習得を重視したのである。

こうした東井の教育思想と実践については、戦前から戦後にかけて「生活綴り方」教育や「生活教育」に取り組んだ国分一太郎や野村芳兵衛らのリアリズム的教育実践、また、白樺派、日本浪漫派との関連が指摘されているが、本稿では、上記のような東井義雄の教育の特質を念頭に置いた上で、それを支えた東井義雄における「いのち」

の思想形成について、その生涯の足跡を辿りながら考察してみたい。

## II. 東井の「いのち」の思想の形成過程

東井の「いのち」の思想は、その生涯における挫折や苦悩をとおして次第に深められていった。まず、東井の生涯の軌跡を時代背景・社会の動向に注目しつつ見ていきたい。<sup>5)</sup>

東井は、明治45年(1912)4月9日に、後に兵庫県出石郡但東町佐々木(現・兵庫県豊岡市但東町佐々木)の浄土真宗本願寺派・東光寺の住職となった父・東井義證と母・初枝の長男として京都市内で誕生している。父・義證が、当時、西本願寺の大谷本廟(京都市東山区五条坂にある浄土真宗の宗祖・親鸞の廟所)に勤務していたため、3歳前半までを京都で過ごしている。その後、大正4年(1915)に父が郷里の東光寺の住職を継ぐため帰郷したのに伴い、両親と妹の正代(大正3年生)とともに東光寺に入っている。

当時、東光寺の門徒戸数は10戸と少なかったが、山や田畑がかなりあり、また、義證の父で義雄の祖父の東井隆法が漢方薬「奇妙丸」の製造販売を行い、村人の病気の相談にも乗っていたようで、ある程度の生活は可能であったようである(現在も当時の薬の製造販売許可の鑑札が楽音寺に保管されている)。

大正7年(1918)、小学1年生になったばかりの5月、母・初枝(但東町正法寺生)が病死している。33歳の若さであった。この母との思い出を東井は後年「わが心の自叙伝」の中で次のように記している。

父が不在の時など、母が仏前に座しておつとめをする時そのかたわらで、母をまねて「きみようむりようじゅにようらい」と唱和しながら見上げる時の母のなんとも言えないうれしそうな

微笑は、いまもあざやかに私の眼前にある。私はそれが嬉しくて母の顔を見たい体にくっついてお勤めをしたものである。後年、ずいぶん仏にそむくような思想を追い求めた私であるが、結局そむき切ることができなかったのは、この母の微笑が脳裏に焼きついて離れなかったからである。<sup>6)</sup>

わが子の悪行についてはきびしくいさめた母であったが、幼い日の母の笑顔が、東井の生涯に大きな感化を与えたことが知られる。

父・義證は妻の死後、後妻として「せき」を迎えている。せきはやさしい人柄で、東井義雄と妹・正代を懸命に養育したといわれる。

せきの人柄については、東井の著『拝まない者もおがまれている』（光雲社、平成12年刊）の中で触れている。実母の初枝が亡くなって一年が暮れたころ、せきが来たが東井はなじめず、なかなか「お母ちゃん」と呼べなかったこと、それが、お盆で義母が実母の墓に真っ先に花を供え合掌してくれたとき、はじめて素直に「お母ちゃん」と呼べたこと、病弱な東井の健康を念じて100日間灸をすえ続けてくれたことなど、義母の慈愛に満ちた懸命の養育への感謝の思いを記している。

大正12年（1923）11歳（小学5年生）の時、京都の平安中学への進学を志すが、経済的な理由で父の許しが得られず断念している。当時、父は、親類の借金の保証人になったのが原因で家財道具まで差し押さえられ、貧困のどん底にあったからである。三度の食事も満足にとれなかった東井は、貧しさから逃れる道は勉学しかないと決意し、うどん箱を机代わりに勉学に励んだという。父に談判して受験だけは許してもらい受験し合格したが、父との約束で進学を断念したのである。

小学校6年を卒業し高等科に進んだ5月、

豊岡中学で行われた小学校准教員の検定試験を受けたが失敗。昭和2年（1927）進学の夢捨てきれず、一番安く学べる学校という理由で姫路師範学校に入学する。運動の苦手な東井は、マラソン部のびりっ子の体験から、「亀はウサギにはなれない。しかし、努力次第では日本一の亀にはなれる」と考え、以後、あえてびりっ子を引き受けた話は有名である。後に東井は、色紙に「一番はもちろん尊い。しかし、一番よりも尊いビリだっている」と書いている。体力的には恵まれなかったが、負けん気だけはしっかり持っていた少年であった。

昭和3年（1928）16歳、姫路師範学校2年の時、「独来独去無一従者」（独り来り独り去る、一人として従う者なし）の言葉に出会っている。漢文の宿題を出されて東井が選んだ文であるが、この文は浄土經典の『無量寿経』の中に見える言葉である。『同経』巻下の正宗分「釈迦指勸」の「淨穢欣厭」には、次のように記されている。

人在世間愛欲之中、独生独死独去独来、  
 当行至趣苦楽之地、身自当之無有代者。  
 （中略）各曼強健時、努力勤修善精進  
 願度世、可得極長生如何不求道。

「人、世間愛欲の中にありて、独り生まれ独り死し、独り去り独り来たる。行に当りて（自己のなす善悪の行為に従って、その果報を受けて）苦楽の地に至り趣く。身自らこれを当くるに、代わる者あることなし。（中略）おのおの強健の時に曼びて、努めて善を勤修し精進して度世（迷いの世界を渡り浄土へ往生すること）を願ひ、極長の生（涅槃の常楽）を得べし。いかにぞ道を求めざらん。」

釈迦が、人びとに、人間の生死の実相を説いて、早く迷いを離れて真実（涅槃・さと）を求めるべきことを説いた経文であ

る。

東井は、この言葉に出会って大鉄槌で打ちのめされたように感じたという。「母はとっくに往ってしまった。父もやがて往ってしまう。私もいつか一人ぼっちになる日が来る」と思い、宗教書をむさぼるように読んだといわれる。彼の「いのち」への問いと思案が、この言葉との出会いによって始まったのである。<sup>7)</sup>

東井は晩年、上の文の「身自当之無有代者」を墨書している（筆者、所蔵）。

昭和7年（1932）3月に姫路師範学校を卒業し、兵庫県豊岡市豊岡尋常小学校に教員として就職する。以後10年間在職し、昭和17年（1942）に合橋国民学校に移る。その後、唐川国民学校、相田小学校に勤務、昭和34年（1959）に校長となる。昭和36年（1961）に高橋中学校、昭和39年には八鹿小学校に勤務し、昭和47年（1972）4月に退職している。

その前半は、先輩の影響もあって生活綴方教育に情熱を傾けることになる。しかし、当時の日本は不景気のどん底にあった。農村は疲弊し、子どもたちの中には、学校へ弁当も持ってくる事が出来ないものもいた。そうした窮乏生活のなかであって、東井はプロレタリア文学にひかれ、宗教に疑問を持つようになる。「こころ」の遍歴の始まりである。東井は、晩年、当時の自分を振り返って次のように述べている。

私のこういう思想傾向は、当然、宗教への疑問を深めることにもなりました。

「その時代の権力者が、貧しい者たちを隷属させ、搾取するのに対して理屈をいわせないようにし、『有難うございます』『もったいのうございます』と、考える力を眠らせ、どんな過酷な要求をも受容させる阿片の役割を果たしているのが宗教というものである」という無神論に、私はどんどん深入りし

ていきました。

事実、私が病身な父に代わって勤務していますと、内陣に住み着いているらしい古ねずみが、お供えしてある御仏飯をたべにくるのです。私がにらみつけてやっても、それくらいのことに驚くねずみではありません。どなりつけるような声をはりあげてお経を読んでも、ビクともしません。そんなねずみにさえバカにされる阿弥陀様に何ができると、思わざるを得ません。

ところが、気がついてみると、何もできない阿弥陀様を拜んで村のみなさんからお供えをさせ、それを横取りして生活している私です。ねずみは人をだましません、私は、人をだまして、お供え物を盗む仕事をしているのです。そう気がつくと、さすがに、自分がはずかしくなります。その思いを私は、当時の日記に、「坊主、偽坊主、汝は飯を盗むか、糞坊主」と書いたりしています。<sup>8)</sup>

東井の内省と自己の在り方への慙愧の思いが述べられているのである。

昭和10年（1935）、23歳で『但馬国語人』に「綴方生活指導略図」を、『綴方精神』に「現実からの発足」などの論文を発表し、綴方教育界でその存在を認められるようになる。

昭和12年（1937）、29歳のとき、理科の授業時間に、一児童から「咽チンコ」（口蓋垂）の機能について質問されたが即答できず、後で調べて答えるが、口蓋垂のはたらきの絶妙さに驚き、身体そのものが、自分で生きているつもりが、実は、自分の意志をこえた不思議なはたらきによって「生かされている」ことに気づき感動する。同時に、子どもから大切なことを教えられたことに気づき、「子どもから学ぶこと」の大切さを自覚するのである。

昭和13年（1938）26歳の時、『綴方教育

の大道』（共著）に「高学年に於ける生活教育と綴方教育」、『綴方教程』（共著）に「童心主義への訣別・教室の組織と綴る組織」の論文を発表する。同年、加藤富美代（兵庫県城崎郡日高町、浄土宗・三昧院で誕生）と結婚する。夫人は病弱であり、60歳頃、難病に罹り、闘病生活を続けながら平成9年（1997）に80歳で没している。東井は晩年、「妻」と題する詩を書いている。

### 妻

「何もしてあげることができなくて  
すみません」  
ポツリと  
そんなことをいう 妻  
「なんにもしてあげることができなくて  
すまん」のは こっちだ  
着るものから たべるものから  
パンツの洗濯まで  
してもらってばかりで  
「なんにもしてあげることができなく  
て」いるのは こっちだ  
しかも 妻に  
「すまん」といわれるまで  
「すまんののはこっちだ」ということに  
さえ  
気がつかないでいた こっちこそ  
ほんとに  
すまん。<sup>9)</sup>

病弱の身で、懸命に家事と育児にいそしんだ妻への、心からの感謝の思いが歌われている。

昭和13年（1938）11月30日に父・義證が62歳で病死する。東井は26歳であった。今までの人生を振り返り、自分にとって父がいかに大きな存在であったかを告白している。「この日から、どのようにして父の到着した世界に迫るかが私の人生の課題となりました」と述べているのである。そして、父の死への思いを、次のような詩文に記している。

### きょうが その日

十一月三十日 十一月の最後の日 この日が 父の最後の日 きょうが その日（中略）帰り着いたら午後十一時半を過ぎていた。 思いがけぬ日の、思いがけない時刻に帰ってきた私を 父は心から 喜んでくれた 「生きていれば こうしておまえたちが 役にも立たんわしを案じてくれる 今 息が絶えても 大きな 大きな お慈悲の どまんなか 世界には仰山な人間がいるけど わしぐらいなしあわせ者が 世界中に あろうかい」 そのようなよろこびを語る声が どういうことか だんだん小さくなり 淡くなり 細くなっていった そして 声が聞こえなくなり 消えた（中略）父は 永遠の世界に だきとられていったのだ 静かに 静かに 永遠の世界に 還っていったのだ。<sup>10)</sup>

父の肉体は死を迎えたが、その「いのち」は「永遠の世界にだきとられ」「永遠の世界に還っていった」と記しているのである。東井は、父の死において、肉体の生命を超えた宗教的な永遠の「いのち」を感じとっていたのである。

父・義證がどのような生涯を送ったかについて東井はそれほど多くは語っていない。

「酒は好きだったし 世帯もちのうまいという父ではなかった 世間の評価は よいといえる父ではなかった 父の 信の事実を 正しく評価していたのは 祖父くらいではなかったかと思う」（『東井義雄詩集』「きょうが その日」）と記している。世間的にはこれといった評価を受けなかった父であったが、内面的な信仰心において祖父・隆法は高く評価していたのである。

上の詩文の末尾に、「もう一年で、私も数えの六十三 父が逝った年令に追いつく しかし 私は とても とても 父の足許

にも到り着けそうにない」と記している。父の偉大さを告白しているのである。父の内的な「いのち」に感動し、敬愛の念を抱いていたのである。

また、次のようにも記している。

亡父よ、私は今にして、ふだん、何とも思はず、自分一人の力で考へ、自分一人の力で思ひ、自分一人の力で行動してゐたと私が考へてゐたすべての事が、空事であつたことに氣附かしめられました。些細な思考も、行動も、あなたといふ大きなうしろだてがあつたからこそ、得意顔で行ふことが出来たのだと思ひます。<sup>11)</sup>

父・義證は病弱であつたが、無欲で正直で誠実な人柄であつたといわれる。朝夕の勤行に際しては、必ず洗顔し、口を漱いでから行つたといわれる。食事の際には、普段使う箸のほかに、仏飯を食するときは別の箸を用いていたといわれる。畑を耕し、冬には鳥取の寺に役僧として勤めていた。門徒からのお供え物は「白豪恩賜録」と表書きした帳簿にすべて記載していた。

東井義雄の実妹・小田正代氏から筆者に届いた手紙には、父・義證や兄・義雄の当時の状況について下記のように記されている。

父は元来虚弱体質でしたが信仰心は厚く、お経（を読むの）も確かで、本山仕込みとでも申しましょうか、報恩講に拝読いたします『御伝鈔』（親鸞の曾孫で本願寺の創設者である覚如編『親鸞伝絵』の中から、詞書だけを別出したもの）、ふし廻し、とても有り難く拝聴したものです。

私がこちらに嫁ぎました頃は、何とか結婚式にも出てくれましたが、その後だんだんと床につく日が多くなり、遂に寝たきりの生活になってしまいま

した。兄（義雄）が受験期を迎える頃、丹後の震災の余波を受け、土蔵の壁が落ち、その翌年、但馬でも稀に見る豪雪に見舞われ、土蔵がつぶれてしまったのです。相次いで鐘楼までがつぶれてしまったのです。住職は寝たきり、わずかな門徒でどうしようもなく、見るもみじめな状態でした。向学心に燃えた兄が、父の枕元で、平安中学の受験だけでも、と頼み込んで合格したのですが、入学させることが出来なかったのです。父もどんなにかつらかったことと思います。（中略）父と過ごした二十年間、粗末な食膳に合掌し、父の唱えた「食前のことば」、今も私の脳裏に焼きついています。「りゅうりゅうみなこれだんしん てきてきみなこれだんば しのようにあらず こうしようにあらず せいりよくなく さんぎょうなし ふくでんのちからによらざるよりんば いづくんぞ このおんじきをうることあらんや つつしんであじののうたんをとわず しなのたしようにえらばず いただきます」。漢字を入れると当て字や誤字になるやもと、あえてかなで書きました。<sup>12)</sup>

（ ）内・筆者注記

往時の東光寺での貧しい生活や、その中で兄・義雄の苦労とともに、父・義證の真摯な信仰生活がよく記されている。

世間的には評価されることの少なかった父の、内面的・宗教的な面での偉大さを、東井は身をもって感じとっていたのである。親戚の借金の保証人になったために経済的苦境にあり、病弱の身で、しかも純一な信仰に生きた父の生きざまが、東井にとってはそのまま「こころの教育」「いのちの教育」ではなかったか。そうした父の影響からか、東井は少年時代、谷川で友だちと魚釣りをしても、「この魚には何億年のいのちの流れがあり、そのいのちを断つのは忍

びない」と言って魚を逃がしたといわれる。東井の、あらゆる「いのち」あるものへの凝視は、「冥加」（みょうが＝知らない間に、仏祖から加えられる利益。あらわに見られる加被力を「顕加」というのに対する）を感謝し、すべてのものを大切にし、貧しい中にも感謝報恩の生活を送った父の、「こころ」の教育によるものではないか。東井は詩文のなかで、「もったいない」「おかげさま」「生かされている」という語をしばしば用いているのである。

昭和16年（1941）、29歳の時、「僕等の二千六百年史」を発表する。雑誌『日本の子供』（文昭社刊）に4回にわたって「国史に対する子供たちの綴方」を連載。今まで、社会に対して批判的な存在であった東井の突然の転向で綴方仲間を驚かせたといわれる。

昭和17年（1942）、30歳で父亡き後の東光寺の住職を継ぐため、故郷の合橋村立合橋国民学校に転勤している。翌18年、『文芸春秋』5月号に「学童の臣民感覚」を、10月号に「国史への礼拝」を発表している。昭和19年（1944）、合橋村立唐川小学校に転勤、学級文集『僕等の二千六百年史』からの抄出と、自身の昭和14年（1919）4月から昭和19年（1944）3月までの実践記録「学童の臣民感覚」を集成して『学童の臣民感覚』（日本放送出版協会）を刊行する。東井の戦争協力の作品として戦後批判された書物である。敗戦後、東井自身が「戦争で犯した私のまちがい」「そんなところに後戻りはしたくない」（東井義雄「シンポジウム・教科の論理と生活の論理—まとめ・民族を敵味方・二分する考への疑問—」〈『別冊・現代教育科学』12号、明治図書、昭和41年12月発行〉）と述べている。<sup>13)</sup>

なお、『学童の臣民感覚』は、「第一部・学童の臣民感覚」と「第二部・国史礼拝」の両部から成るが、本稿の冒頭に揚げた菅原稔氏の「『学童の臣民感覚』と東井義雄の転向」において分析がなされている。その

なかに、次のような記述が見える。

ここにおける東井義雄の思想過程は、「マルクス主義から右翼超国家主義へ」という「転向」としてとらえられるべきものではない。それは、あくまで一浄土真宗末寺の長男として生まれた東井義雄が一「他力本願」という宗教的認識をその基調とし、マルクス主義を一時期「知識」として「理解」し、放棄して行った過程として、とらえられるべきであろう。<sup>14)</sup>

また、『学童の臣民感覚』で東井が述べた、「学校は、無窮の御本願の礼拝所、臣のいのちの開頭所」という考えは、今日の観点からは否定されても、書くこと「作文・綴り方」の持つ機能をすべての教育の場に適応させることで、子ども自身の内面的自覚を呼び覚まそうとした実践について菅原氏は、「今日の作文教育において大切なもの」との評価を与えている。

昭和20年（1945）8月15日敗戦を迎え、東井の苦悩の日々が始まる。その苦しみを後日、次のように記している。

私は、今まで述べたように、正真正銘の戦争犯罪人である。本気になって教え子を戦場に送り、国に殉ずることの美しさを説いた人間である。教え子や私に共鳴してくれた若い学徒はその道を行ってしまったのに、私自身は、いのちどころか、教職さえなげうつことができずに、のうのうと今日まで長らえてしまったのである。10年間ペンをすてたぐらいのことでつぐないのつくことではない。朝夕瞑目して、逝った人たちを憶念しているからといってゆるされることではない。この卑怯・無責任な私の生きる道は、ただ自分自身に対してでもせめて偽りを犯さずに生きることではないかと思う。<sup>15)</sup>



昭和22年(1947)母校の相田小学校に転勤し、以後14年間勤務する。その前半は、戦争責任を感じて沈黙を守った苦悩の時代であった。しかし、その苦悩の中から新たな教育観が芽生えていくのである。学校通信『土生が丘』や著書『村を育てる学力』となるのである。

昭和32年(1957)44歳で戦後10年間の沈黙を破った『村を育てる学力』(明治図書)は、当時の日本社会の動向に警鐘を鳴らすものであり、とくに農村に生きる大人や子供の生きざまに重要な指針を与えるものであった。その中の一文を記すと次のとおりである。

村の子どもが、村には見切りをつけて、都市の空に希望を描いて学ぶ、というのでは、あまりにもみじめすぎる、と思うのだ。そういう学習も成り立つではあろうが、それによって育てられる学力は、出発点からして「村を捨てる学力」になってしまうのではないか。

村は事実、希望も容易には持てないほどみじめだ。だが、そうであればあるほど、そのみじめな村を、希望のもてるような村に育てようとするところに、希望が築けないものだろうか。

私は、子どもたちを、全部村にひきとめておくべきだなどと考えているのではない。研究所の研究報告がいつているように、「過半が都市にでる宿命にある」なら、それもいいと思う。ただ私は、何とかして、学習の基盤に、この国土や社会に対する「愛」を据え付けておきたいと思うのだ。「村を捨てる学力」ではなく、「村を育てる学力」を育てたいのだ。みじめな村を見捨てず、愛し、育て得るような、主体性をもった学力なら、進学や就職だってのり超えるだろうし、たとえ失敗したところで、一生をだいなしにするよ

うな生き方はしないだろうし、村におれば村で、町におれば町で、その生まれがいを発揮してくれるにちがいない、と思うのだ。<sup>16)</sup>

昭和36年(1961)48歳で但東町立高橋中学校長となる。

昭和39年(1964)51歳で神戸新聞社より、地域の教育文化に尽くした功績により「平和文化賞」を受賞。同年、八鹿小学校長となる。ここでの8年間で教師としてもっとも充実した時代であったといわれる。『培基根』は、この時代に校長として教職員を指導した記録である。昭和47年(1972)60歳で定年退職、兵庫教育大学の非常勤講師となる。以後、平成3年(1991)79歳で亡くなるまで全国各地で講演するが、平成2年(1990)に子息の義臣氏(当時小学校教諭)が学校で突然倒れ意識不明となり、その悲しみ・苦悩を通してさらに東井の「いのち」観は深められていくのである。<sup>17)</sup>

### III. 東井義雄の思想の主要点

東井の「いのち」の思想、「いのち」観について考察しようとする場合、次のような視点が考えられる。

- 1、幼少時における家庭生活・生活環境
- 2、青年期における時代の影響、とくに貧しい農村の生活
- 3、浄土真宗の寺院に生まれ育ったことに起因する宗教的感性
- 4、小学校教師としての生活実践・綴り方教育実践
- 5、戦時下における思想形成
- 6、敗戦後の苦悩と葛藤・再起
- 7、東井義雄の「いのち」の思想の現代的意義

これらについては、すでに東井義雄の生涯の軌跡の中で触れてきたが、今一度主要点を見ておきたい。

東井が生まれて6歳で母と死別し、27歳

で父が亡くなるまでの約20年間に6つの葬式を出したこと、自分も生まれつき虚弱な体質であり、義母が100日間灸をすえて健康を願ったことを告白している（東井義雄著『拝まない者もおがまれている』光雲社、64-65頁）。身体的生命における「生と死」の問題について考えざるを得ない状況にあったことが推測される。

次いで、身体のはたらきの不思議を自覚した事件に「咽チンコ（口蓋垂）事件」がある。東井が29歳のとき、担任した高等科の一生徒から「口蓋垂」の役目について質問され、即答できず、後で調べて、それが食べ物が気管の方へ行かないよう、食べ物を飲み込む時には、気管の入り口をふさいでくれるはたらきをしていることがわかったとき、「私は頭のあがらぬ感動のとりこになってしまった」と述べている。それを次のように記している。

それが、どんなはたらきをしているか知らないくらいだから、すまないなあと思ったこともない。ありがとうと礼をいったこともない。それどころか、俺が生きてやっているのだというような態度で生きてきたこの私のために、私が母親の乳をのみこみはじめたそのときから、はたらきどおしにはたらきつづけてくれたはたらきがあったということに目が覚めたのであった。気がついてみると、それは「口蓋垂」だけではなかった。目も耳も鼻も口も、手も脚も、心臓も、胃も腸も・・・わたしのいのちにかかわる呼吸さえもが、わたしのためにはたらき続けてくれていたという事実が目覚めさせられたのである。生かされてここまできた私を知らされたのである。そして、それまで、何げなしに読みすごしていた「凡聖逆謗齊廻入」が、私のためのおはたらきだったと実感をもってうなづかせてもらえたのであった。<sup>18)</sup>

（「凡聖逆謗齊廻入」とは親鸞の「正信偈」の文）

東井はこの事件を通して、身体のはたらきを当然事とせず、「生命」の不思議さと、「生かされている」ことの「ただごとでない」ことへの目覚めを体験しているのである。宗教的な生命体験である。

東井は、あらゆるものが「自分を生かしてくれている」という感謝の念をもっていた。次のような詩を詠んでいる。

せめてわたしも・・・

数えきれないほどのお米の一粒々々が  
一粒々々のかけがえのないいのちをひ  
っさげて いま この茶碗の中に  
わたしのために。  
怠けているわたしの胃袋に目を覚ま  
させるために山椒が  
山椒のいのちをひっさげて  
わたしのために  
梅干しもその横に  
わたしのために・・・  
白菜の漬物が  
白菜のいのちをひっさげ  
万点の味をもって  
わたしのために・・・。

もったいなすぎる  
もったいなすぎる

せめて わたしも  
白菜の漬物のひときれにでもなって  
ひとの心に  
よろこびの灯をともしたい  
思いあがるなど  
叱られてしまいそうな気もするが…。<sup>19)</sup>

一粒のお米、一切れの野菜にも、私の「いのち」を支えていてくれていることを感謝しているのである。「もったいなすぎる」と表現している。「もったいない」という言葉は『広辞苑』では「勿体無い」と

書き、「物の本体を失する意」と記されている。「そのものの値打ちが生かされず無駄になるのが惜しい」とも記されている。しかし、この詩の「もったいなすぎる」の「もったいない」は、単に「無駄になるのが惜しい」だけの意味であろうか。お米にも野菜にも、単に植物としての「生命」ではない人格的な「いのち」を見出していたのではないか。それをいただいて、今私が「生かされている」ことへの謝念が感じられる。

東井は、彼の教育思想の原点ともいえる「いのち」の思想や、それにもとづく「子ども」観を示す詩を多く詠んでいる。いま、その中からいくつかの詩を揚げておく。

どの子ども子どもは星  
 どの子ども子どもは星  
 みんなそれぞれがそれぞれの光をいただいて まばたきしている  
 ぼくの光を見てくださいとまばたきしている  
 わたしの光も見てくださいとまばたきしている  
 光を見てやろう  
 まばたきに 応えてやろう  
 光を見てもらえないと子どもの星は光を消す  
 まばたきをやめる  
 まばたきをやめてしまおうとしはじめて  
 いる星はないか  
 光を消してしまおうとしはじめて  
 いる星はないか  
 光を見てやろう  
 まばたきに 応えてやろう  
 そして  
 やんちゃ者からはやんちゃ者の光  
 おとなしい子からはおとなしい子の光  
 気のはやい子からは気のはやい子の光  
 ゆっくりやさんからはゆっくりやさんの光  
 男の子からは男の子の光

女の子からは女の子の光  
 天いっぱい 子どもの星を  
 かがやかせよう。<sup>20)</sup>

この詩は、教師のとるべき子どもへの目線を示したものと思われるが、そこには一人ひとりの子どもの、それぞれの個性・特質を見極め、それを伸ばし、子ども一人ひとりの「いのち」を輝かせることこそ教師の務めであるという思いが窺える。一人の子ども切り捨てることのない教育の提唱であった。おそらく東井が日々読んだ浄土經典の『阿弥陀経』に説かれている、極楽浄土のハス池を描写した「池中蓮華大如車輪、青色青光・黄色黄光・赤色赤光・白色白光、微妙香潔」（極楽浄土の池中のハスの華は、大きさは車輪のようであり、青色には青い光、黄色には黄色い光、赤色には赤い光、白色には白い光を放っていて、微妙の清らかな香りを漂わせている）の文から学びとった、すべての「いのち」は、それぞれに異なりながら、それぞれの光を放ち、照らしあい、清らかな芳香を漂わせているという、仏の智慧と慈悲の眼を通して詠まれた「いのち」の詩であろう。

また、次のような詩を詠んでいる。

自分は自分の主人公  
 自分は 自分の主人公  
 世界でただ一人の自分を  
 光いっぱいの自分にしていく 責任者  
 少々つらいことがあったからといって  
 ヤケなんか おこすまい  
 ヤケをおこして  
 自分で自分をダメにするなんて  
 こんなバカげたことはないからな  
 つらくたってがんばろう  
 つらさをのりこえる  
 強い自分を 創っていこう  
 自分は 自分を創る責任者なんだから  
 な。<sup>21)</sup>

東井義雄の「いのち」の思想には、「自力的なもの」と「他力的なもの」があるように思われる。「自力的なもの」の背後に「他力的なもの」を見ていた、と表現するほうが妥当かもしれない。

上の詩や、「自分は 自分の主人公 世界でただひとりの 自分をつくっていく 責任者」、「つらくても おもくても 自分の荷は 自分で背負って 生きさせてもらう」(遺墨)の言葉によくそれが表れている。自分の「いのち」を自ら精いっぱい生きる、自分を自分の努力で「創って」行こう、という自力的な精進・努力の強調とともに、「生きさせてもらう」という言葉のうちには「生」への謙虚な思いと謝念が見られるのである。東井がしばしば語った「生きさせてもらう」「いかされている」「ありがたい」「もったいない」という言葉の背後には何があるのだろうか。宇宙を包みこむ無限なる「いのち」のはたらき、絶対的な大いなる「他力」(私を支えはぐくむ大いなる他なる「いのち」のはたらき)を感じとっていたのではないか。

先にも述べたように、東井は幼少の頃から体の弱い子であり、運動会で走ってもビリになるような子であったことを告白している。しかし、そうした自分の身体的弱さに負けてはいなかった。運動が苦手な子に次のように励ましている。

ビリであることは、ちっともはずかしいことではない。なまけることのほうが、よっぽどはずかしいことだ。走ることに限らず、生きていく間には、いろいろなことでビリを走らなければならないことがあります。しかしそのとき、どうか日本一立派なビリであることができるよう、こころがけてほしいと思います。堂々としたビリであってほしいと思います。これは、なかなか難しいことです。ビリになると、どうしてもひくつになり、はずかしくな

り、ここまで貧乏になりやすいからです。ですが、ビリの味のわかる人間でなければ、困っている人、弱い人、貧しい人の気持ちなんか、絶対にわかるものではありません。とにかく、ビリになっているときは、その人にとって得がたい勉強の機会をあたえられているときだと思います。<sup>22)</sup>

東井の詩文には、子どもへの慈愛と「いのち」への愛しさと共生的生命観が見られる。教師である自分を終生見つめ、「教える教師」を否定し、「子どもに学び」、「子どもとともに」生き、「子どもに寄り添う」教師として生涯を送ったのである。自己否定を通して大いなる「いのち」の存在を見出し、それによって絶対的な「いのち」の肯定に至ったのである。否、大いなる存在に目覚めることで自己否定がなされ、その否定をとおして「いのち」の絶対肯定がなされた、と表現する方が適切かもしれない。「いのち」の絶対肯定と共生的生命観こそ、現代において最も大切なものではないだろうか。東井義雄の「いのち」の思想は、現代の差別や排除をのりこえる実践を生み出すものを持っているのではないか。

## 結 び

東井の「いのち」の思想と教育観は、彼の生涯をとおした苦悩・挫折・葛藤など紆余曲折を経て形成されたものであった。先行研究でも触れられている白樺派や日本浪漫派、日本ナショナリズム、農民運動のほか、国家神道や仏教教団とくに東井が所属した本願寺教団における戦時教学、親鸞の思想など、さまざまな要素が絡み合う中で苦悩し思索しつつ、つねに子どもに寄り添い、子どもから学び、生活体験を重視する中で育まれたものであった。また、東井の「いのち」観、「いのち」の思想には、「自力的なもの」と「他力的なもの」が重層的

に存在、ないしは「自力的なもの」の背後に「他力的なもの」が存在することが見られた。科学的・生物学的生命観とは異なる宗教的生命観があった。そして、そのような「いのち」観、「いのち」の思想が、自己の「いのち」にたいする「生かされている」「もったいない」「ありがたい」の感謝の心情となり、さらに他の「いのち」にたいする謝念と「いつくしみ」の情となり、共生的生命観を生み、すべて「いのち」あるもの、さらに無機質な「物」に対しても「いのち」を感じ取る態度となり、それらが「児童に寄り添う教育」、「生活を重視した教育実践」を生み出したことを確認し得たのである。

現代の、いじめや虐待、傷害や殺人など「いのち」を傷つけ損なう行為の増加、多発する「こころ」の病、孤立化、モラル崩壊、環境破壊など深刻な社会状況の中で、東井の「いのち」観、「いのち」の思想とその教育実践は再評価されるべきであろう。

#### 注

- 1) 現代国語教育論集編集委員会編、菅原稔編集・解説『現代国語教育論集成・東井義雄』(明治図書、平成3年刊、10頁)。
- 2) 同書、11頁。
- 3) 同書、16頁。
- 4) 『現代教育科学』6月号(明治図書、昭和35年発行)
- 5) 東井義雄の年譜については、主として、現代国語教育論集編集委員会編、菅原稔編集・解説『現代国語教育論集成・東井義雄』(明治図書、平成3年刊)末尾〈付録〉の「東井義雄略年譜」、及び東井義雄遺徳会編『「いのちの教育」を求めつづけた東井義雄の生涯』(東井義雄記念館内・東井義雄遺徳顕彰会、平成6年刊)に拠った。
- 6) 「わが心の自叙伝」(『のじぎく文庫・わが心の自叙伝〈一〉』神戸新聞社、昭和42年刊)。
- 7) 東井義雄著『拝まない者もおがまれている』(光雲社、平成12年刊、新装初版、78-81頁)。東井義雄著『仏の声を聞く』(探究社、平成15年刊、22-24頁)。
- 8) 東井義雄著『仏の声を聞く』(探究社、平成15年刊、31-32頁)。
- 9) 東井義雄著『東井義雄詩集』(探究社、平成元年刊、39-40頁)。
- 10) 同書、56-61頁。
- 11) 小田正代氏自筆「手紙」(平成16年9月8日付)。(菊藤所有)
- 12) 東井義雄は戦時中の戦争協力について「努力しても努力しても戦いになじめず、戦勝祈願の神社参拝に参らせられても、どうしてもかしわ手を打てなかった私が、遂にかしわ手をうつようになったのは、子どものいのちの中に、本然に民族のいのちの流れを感じるようになったからだ。おとなたちの戦争協力理論には嘘も感じたが、理くつや思想以前の日常感覚の中に「臣民感覚」とでもいうべきものを感じては、どうしようもなくなってしまった」(『私の『いのち』の思想について』『著作集1』)と、自身の転向を告白している。

東井の「いのち」の思想に至る過程と戦争協力に関する先行研究としては、鶴見俊輔・久野収・藤田省三「大衆の思想」(『戦後日本の思想』勁草書房、1966年)と中内敏夫・原芳男「教育者の転向—東井義雄」(思想の科学研究会編『共同研究転向下』平凡社、1962年、1978年改訂増補版)がある。とくに、東井の戦争責任を批判的に論じたものとしては、安川寿之輔著『十五年戦争と教育』(新日本出版社、1986年刊)や長浜功著『日本ファシズム教師論』(大原新生社、1981年刊)がある(油井原均「東井義雄の教育思想における「いのち」論形成過程の検討—戦前・戦中期の教育実践記録を中心に」〔立教大学教育学研究年報第41号、1998年1月〕参照)。また、本稿の冒頭に揚げた油井原均氏の二論文では、東井義雄のいう「いのち」が、「一貫した概念であり、民族的アイデンティティに通じる」ことが指摘されている。とくに、後の論文には、東井義雄の思想と日本浪漫派、中でも浅野晃(1901-1990)の思想との共通性が指摘されている。

しかし、東井の転向については、東井が僧侶として所属していた本願寺教団が戦時中に教示した戦争肯定の教学「戦時教学」とも無関係ではないのではないかと。戦時中の真宗の学者の論書にも、戦争遂行への協力や戦争の正当性を説いたもの—たとえば暁烏敏著『臣民道を行く』(一生堂書店、昭和17年刊)など—があり、そうした論書を熟読していたであろう東井が、何らかの影響を受けていたことは十分推測されよう。この問題については稿を改めて考察した

い。

- 13) 『現代教育科学』64号。東井義雄遺徳顕彰会編『「いのちの教育」を求めつづけた東井義雄の生涯』平成6年刊、13頁抄出)。
- 14) 現代国語教育論集編集委員会編、菅原稔編集解説『現代国語教育論集成・東井義雄』(明治図書、平成3年刊、394-395頁)。
- 15) 東井義雄著『いのちとのふれあい』(探究社、昭和53年刊、36-42頁)。
- 16) 東井義雄著『いのちとのふれあい』探究社、昭和53年刊、36-42頁)
- 17) 同書、18-20頁。
- 18) 同書、41-42頁。
- 19) 同書、18-20頁。
- 20) 東井義雄著『東井義雄詩集』(探究社、平成元年刊、225-226頁)。
- 21) 同書、289-290頁。
- 22) 同書、289-290頁。

## **ABSTRACT**

### **Toh-i Yoshio's Concept of 'Inochi'**

Nori KIKUFUJI

Toh-i Yoshio, undeniably one of the most respected educators of Japan(1912-1991), an on the spot teacher by profession of Japanese language, had struggled through his tormenting self-finding process for the long sought basic cornerstone of youth education in Japan.

In this thesis I have focused upon the concept of 'Inochi', which had brought not a little impact upon the practicality of today's youth education in Japan. His thoughts are represented by such terminology as 'Education of life', 'Education of heart' and 'Education to nurture the burgeoning strength of each and every individual to develop'.

For the completion of my work, I have depended not only on such materials regarding his works and studies heretofore published but also on some of the new findings of his works discovered after a thorough revised survey.

My findings from the studies reveal the following ;

Toh-i's concept of 'Inochi' in education was formed through his unflinching confrontation and struggle with his search for the meaning of his own life. He apparently had realized that the foothold of men grounded upon the dual structure of elements within and elements without, centering one's own being.

Obviously the dual structured concept was influenced by his own religious landscape of human life, transcending the analytical meaning of life obtained from the natural science or biology.

Aside from the conventional thoughts and ideology, he was aroused by his revelation that a universal force did exist to transform the de-facto being of every man's life and being. This revelation became the bottom line of his challenging work in developing his thoughts on the modalities of practical education that consequently weighed much more on the meaning of life, supported by reverence and deep respect to the whole being of each child.